

「教育のつどい2014」アピール

憲法と子どもの権利条約を生かし、子どもたちの発達を保障する教育の実現を！

「教育のつどい2014」は、香川県高松市で8月16日から3日間の日程を終え、のべ5000人の父母・国民、教職員のみなさんが参加し、本日終了しました。豪雨による被害などさまざまな困難もある中、全国からご参加いただいたみなさん、つどい成功のために奮闘していただいた現地要員のみなさん、サポートホール高松をはじめすべての関係者のみなさんのご協力とご尽力に心からの感謝と敬意を表します。

「教育のつどい2014」は、安倍内閣が教育委員会制度や教科書制度の改悪、「道徳の教科化」、全国一斉学力テストの学校ごとの結果公表、「土曜授業」、「英語教育の早期化」など矢継ぎ早の「教育改革」を安倍「教育再生」としてすすめる中で開催されました。

私たちは、これらの政策の目的が、「戦争する国」をつくり、一部の大企業の利益を守るための「人材」育成であり、教育を政治利用しようとするものであることを明らかにしてきました。そして、子どもたちの成長・発達を保障する教育はどうあるべきか、何が重要なのかについて、各地でいとなまれている実践を持ち寄り、討論し、交流しました。

開会全体集会は、香川の大学生や子どもたちが躍動するなど、文化の香り高い現地企画で始まりました。松本春野さんと小森陽一さんの対談では多様な人間性を認めあうことが民主主義の基本であり、子どもの成長にとって大切なものであることが語られました。教育フォーラム、分科会では、安倍「教育再生」が、子どもたちや保護者、教職員を追いつめ、苦しめている実態が語られるとともに、貧困と格差の中で子どもたちの学ぶ権利が侵害されている実態が報告されました。そして、これらの困難を克服し、子どもたちの成長・発達を保障するためにもその実態から出発し、子どもの声に耳を傾けること、保護者や教職員の共同こそが重要であることが、各地の実践を通じてあらためて確認されました。

「学校がセンター試験で点数が取れる生徒の育成に終始している」と話す高校教員、『学力テストじゃない！』とあらためて思いました」と語る母親、「子どもたちに自分の頭で考える力をつけさせたい」と願う青年教員、「学力を人質に民主主義を破壊し、『戦争する国』をつくろうとしていることは許せない」という父親の声、「学級づくりで学力づくり」など「学力とは何か」について討論・交流が深められました。また、憲法改悪がねらわれる中、憲法学習や平和学習の実践も多数報告されました。

そして、多忙化の中でも子どもたちと向き合う努力のなかでとりくまれている全国の実践に励まされ、「勇気もらった」「元気が出た」、「今からでも遅くない。子どもと教育について同僚に向けて語っていきたい」と新たな決意を固める集会となりました。

「教科書が真実を語ってくれなければ私たちは何を信じたらいいの？真実を知らされないままに考えることに意味があるの？」との高校生の告発、3年目の教員の「子どもの話をしっかり聞くとたいいていのことは解決する」「親の願いを受け止めて子どもとかかかわると子どもがよいふうになる」とのレポート、「私たちは今、学ぶことの意味が問われているのですね」と自問する教員、いっそう広がった若い世代の参加と活躍が参加者全体を励ますものともなりました。

子どもたちと教育の未来に心を寄せるすべてのみなさん

私たちは、本集会を通じて明らかとなった安倍「教育再生」のねらいをはね返し、子どもたちを人間として大切に育てる教育とそのあり方について職場や地域、家庭で話しあい、憲法と子どもの権利条約を生かし、子どもと教育を守るとりくみに力を合わせることを、そして、子どもたちを再び戦場に送らないために、憲法を守り生かすとりくみに全力をあげることを心からよびかけるものです。

2014年8月18日

「みんな21世紀の未来をひらく教育のつどい 教育研究全国集会2014」実行委員会